

特集

知ろう・つながろう
渋谷の居場所

～③若手福祉職員の居場所～

今回のテーマは「若手福祉職員の居場所」です。居場所に必要なことは何なのか、どんな場所を求めているかなど、若手に向けた活動について取材をしてきました。お二人と一緒に居場所について深掘りして考えていきたいと思います。

今回は、「次世代ネットワーク」の発起人であり、まとめ役であるNPO法人ヒューマンケアクラブストライド統括長の原真衣さんと、現在この活動の中心メンバーとして皆を引っ張っているハートバレージぶやの中村優樹さんに取材をさせていただくことが出来たので、お二人と一緒に考えていきたいと思います。



お話を伺ったハートバレージぶやの原さん(左)と中村さん(右)
—中央は筆者—

●次世代ネットワークとは

まず初めに、次世代ネットワークとはどのような団体なのかをざっくりと説明すると、渋谷区の福祉の次世代を担う主に20～30代の若手(管理職以外)の福祉施設職員が集まって様々な活動を行なっている団体です。今まで、講師の先生をお呼びしての研修や、渋谷区内の他の事業所と職員交換研修を行なって他の事業所に一日実習に行ったり、来てもらったりしました。また次世代ネットワークが運営を担い、それぞ

れの事業所の自主製品販売会を行なったりもしました。

次世代ネットワークは、作業所連絡会という作業所間の共同受注や情報共有のための会議に参加していた原さんが、10年ほど前の当時、管理者などの役職の人たちしか事業所間のつながりがなく、現場の職員同士でもつながりがあったほうが良いのではないかという思いを抱き始まっていきました。

また、福祉の業界では若者の離職率が高いことが課題となっています。職場とは違った人間関係で同期のような似た立場の人たちで集まって悩みを相談出来たり、リラックスしたりできる憩いの場として、また時には熱い議論を交わすことで、福祉業界で長く働くための受け皿としての役割も次世代ネットワークにはあります。

活動を始めた当初は就労継続支援B型の事業所の職員がほとんどでしたが、最近ではその他にも就労移行支援や放課後等デイサービス、グループホームなど様々な種類の福祉職員が参加しており、年に一回自分たちの事業所をプレゼンして多職種間での交流を促進しています。また、原さんが自

立支援協議会の中で次世代ネットワークの活動を長年報告していたため、区役所にも活動を認知してもらえ、区役所の障がい者福祉課の若手職員も次世代ネットワークに参加するようになっていきます。

●居場所とは

次世代ネットワークが若手職員にとってリラックス出来て、悩みが相談出来たり他愛もない話が出来たりする憩いの場であるということは話してきましたが、今度は原さん、中村さんにとって「居場所」とはどんな所なのかを聞いてみました。

原さん「自分が認められていて、対等に分かり合える人がいる場所かな」

中村さん「原さんとほとんど同じことを考えていて、同期や仲間がいるところが居場所だと思います。また、福祉の現場では、様々な年代や立場の人が混ざりあっていることが多く、大きな組織でもない限りなかなか同じタイミングで入職する同期というのは珍しいです」

原さん「そんな中で職場に同期や同じ立場の人が少なくて寂しい思いがあり、気楽に交流できる場を作ろうと思いました」

私はおかし屋ぱれっとに入職して2か月程経った頃に初めて次世代ネットワークに参加しました。その時は学校を卒業して社会に出たばかりで不安もありましたが、とても暖かく迎え入れてくれ、同じような状況の人も居てとても気持ちが楽になったことを覚えています。

●居場所の今後

憩いの場としての次世代ネットワークはこれからどうなっていくのでしょうか。次世代ネットワークの課題や展望についてもお聞きしました。

中村さん「次世代ネットワークがとても居心地の良い場所になっていることは大変嬉しく思っています。しかし、それによって参加している人が流れに身を任せるだけになって主体性や自主性が損なわれてしまうのは勿体ないことだと思うので、今後は参加してくれている人たちが自分のやりたいことなどを発信して行動出来るようになっていってもらえたら嬉しいです。また、次世代ネットワークで何かを企画して活動する際に、ほとんどの人が若手なので手探りで準備をしていくことが多いですが、そのことによって仲間同士で話し合ったり意見を交換して問題に対処したりしていくことで、ノウハウや自信がついて自主的に行動できるようにステップアップしていければと考えています」

そして、ゆくゆくは作業所連絡会から次世代ネットワークが出来たように、次世代ネットワークから何か新しい動きが出来上がってきても面白いのではないかと話してくれました。

人は自分にとって過ごしやすい居心地の良い場所を探し求めています。そして、そのような場所を見つけるとそこに根を下ろします。その次は誰かの居場所になる場所を育てていくことになります。

つまり、最初は自分にとってどんな場所が合っているか、過ごしやすいかを考えながら居場所を探しますが、ある程度成長していくと、今度は他の人にとってどんな場所が過ごしやすいか、居心地が良いかを考えながら居場所を作っていく人へと変わっていきます。

●まとめ

今回、インタビューをさせていただいたことで、今後の人生において大事なことが分かったような気がします。

私は学生生活が終わり、社会人になってまだ2年目です。働き出した当初は平日の過ごし方から休日の過ごし方まで生活が全て変わり、正に先ほど記述した通りに居場所を探していたように思います。そして、次世代ネットワークという居場所を見つけ、活動に“参加”をしていました。

今年度からは次世代ネットワークの企画運営にも関わるようになり、入りたての頃と今では考える事が変わってきたと思います。初めの頃は、どんな人がいるのだろう、どんなことをするのだろうなどといった事が気になっていましたが、今は他の企画運営のメンバーと話し合いながら、どんな事をすれば参加したくなるか、参加してくれた人に楽しいと思ってもらう為にはどうしたらよいかということ“考える”ようになりました。

お話を伺って感じたのは、そのどちらの経験も自分にとって大事だったなという事です。新しくどこかのコミュニティに参加したり自分のこれまでの生活を変化させ

たりするというのは勇気のいることです。新たな場所に参加するあのドキドキした経験が、他の人を受け入れるために活着していると感じます。

また、新たな人を受け入れ、どんどん組織として新陳代謝をしていくことで気持ちの良い居場所になるとも、お二人が話してくれました。確かに、組織が閉塞的になってしまうと同じ人達としか話さなくなってしまう、コミュニティが狭くなり窮屈に感じてしまうだろうなと思いました。

さらに「居場所」についての考え方はハッとさせられるものでした。家族などの特別な場所以外の居場所は、案外誰かがみんなのために環境作りをしてくれていたのかも知れないという視点が新たに自分の中に出ました。自分が誰かの居場所を作ることになるのはまだまだ先な気がしますが、お話していただいたことを無駄にせず、自ら主体的に動くようにしたり、もし自分が居場所を作っていく様になったら、初めて参加した時のことを忘れずに、どんな雰囲気にしたら参加しやすいかなどを考えたり出来るようにしたいと思います。

今回は若手福祉職員の居場所というテーマで次世代ネットワークの原さん、中村さんに大変お忙しい中、お時間を頂き取材させていただきました。その中で、次世代ネットワークの成り立ちやお二人の思いを知ることができ、貴重な経験ができたことを心より感謝しています。

(おかし屋ぱれっと 井上 ムハンマド)